

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530846

研究課題名(和文) 幼児の他児認知形成に及ぼす保育者の言葉がけの影響

研究課題名(英文) The influence of caregivers speech on the other children perception of the young child.

研究代表者

松永 あけみ (MATSUNAGA, AKEMI)

群馬大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：10222613

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円、(間接経費) 570,000円

研究成果の概要(和文)：集団保育場面において、他児に攻撃行動などのネガティブな行動をする幼児に対する保育者の言葉がけの、周囲の幼児のその子に対する認知への影響を明らかにすることを目的として、実験的研究を実施した。その結果、幼児の行動や特性を否定的に注意する言葉がけよりも、行動の意図を代弁しながら注意する言葉がけをする方が、周囲の子どもたちのネガティブな行動をとる幼児に対する好意的評価が高いことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the influence on the perception of the young children caregivers speech to the young child to the Negative behavior such as aggressive behavior in the group nursing scene.

As a result, more than speeches that negative note the characteristics and behavior of young children, how to speech to be careful while speaking for the intention of the action, the favorite evaluation of the young child to take action Negative of children around higher revealed.

研究分野：発達心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：幼児の他児認知 保育者の言葉がけ 発達の気になる子

1. 研究開始当初の背景

生涯発達にとって重要な意味を持つ仲間関係形成の始まりが、保育所や幼稚園での子ども同士のかかわりである。幼児は子ども同士のかかわりを通して、自己の発達はもちろんのこと、他者理解や社会的スキルなど他者とかがわる力の基礎を培っていく。その意味で、幼児期の子ども同士のかかわりの経験は、その後の発達にとって非常に重要である。しかし、集団保育を経験している全ての子どもたちが、必ずしも子ども同士のかかわりを十分経験しているわけではない。時間の経過とともに、子どもたちは特定の子ども同士によるかかわりを多く持つようになり、仲間関係を形成していく。しかし、中には他児から敬遠されがちになり、他児とのかかわりが少なくなってしまう子どもも出現してくる。そのような場合、子ども同士のかかわりが持ちにくい原因として、当該幼児の行動特性など個人内要因に起因され、乱暴だからあの子は敬遠される、だから、乱暴な行為をやめさせようというような当該幼児への働きかけが多いように思われる。しかし、場合によっては乱暴な行為をして保育者から叱られることが、周りの他の子どもたちからの「あの子は悪い子」という見方を助長し、その子とのかかわりをさらに遠ざけることにもなりかねない。

また、近年、保育場面では保育者にとって気になる子といわれる子どもたちへの対応が課題となってきている。そして、その中には、発達障害児も少なからずいる。そのような子どもたちは他児とのかかわりに課題を持つことが多いが、他児とのかかわりの様子は一様ではない。クラス内で受け入れられながら生活している子どももいる一方で、他児から拒否されてしまっている子どももいる。発達障害児も含めて、保育場面において気になる子をめぐる子ども同士のかかわりも、その子ども側の個人内要因ではなく、その子を取り巻く子どもたちの当該幼児への対人認知が、子ども同士のかかわりに影響を与えているのではないかと考える。

以上のように、本研究では、他児とかがわりがうまく持てない原因として、当該幼児の個人内要因ではなく、その子を取り巻く子どもたちの当該幼児に対する特性認知に注目する。そして、この特性認知の形成に、保育者の当該幼児へのかかわり方、特に、周りの幼児に聞こえる言葉がけが重要な影響を及ぼすのではないかと考えた。しかし、先行研究において、この点に関してほとんど研究されていないため、本研究では、この点を実証したいと考えた。

2. 研究の目的

以下の2点を明らかにする。

(1) 保育者が考える子ども同士のかかわりが難しい子どもの行動特性を明らかにし、その子に対する保育者の言葉がけの内容と、その際の保育者自身の言葉がけの周囲の子

どもたちへの影響についての意識を明らかにする。

(2) 幼児の他児への好感度や内的特性認知が、保育者の言葉がけの内容によって影響されるか否か、するとすれば、具体的にどのように影響されるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

上記の目的(1)のために、保育者に意識調査を実施した(調査研究)。目的(2)のために、2つの実験的研究を実施した(実験的研究1, 実験的研究2)。

(1) 調査研究

目的 以下の4点を具体的な目的とする。

- 保育者の捉える「気になる」子どもの行動特徴を明らかにする。
- 「気になる」子どもへの具体的な対応について明らかにする。
- 保育者の対応の周囲の子どもたちの行動への影響についての意識を明らかにする。
- 保育者の対応の周囲の子どもたちの「気になる」子どもに対する認知への影響についての意識を明らかにする。

方法

・対象：G県M市の保育研修に参加した保育所保育士および幼稚園教諭、62名。

・手続き：無記名式の質問紙を配布し、後日、郵送で返送してもらう。32名から回答があった。

・質問内容：目的のaおよびbに関して自由記述を求めた。目的のcおよびdに関しては、影響の程度を4段階評定を依頼するとともに、具体的な影響について自由記述を求めた。

結果

a. 保育者が捉えた「気になる」子どもの行動特徴

「状況への順応性の低さ、こだわり」や「他者への乱暴、暴言、妨害」に関する行動を、6割以上の保育者が「気になる」行動と捉えている。また、保育者の半数近くが、「落ち着きのなさ、集中力の低さ」が「気になる」としている。

b. 「気になる」子どもへの保育者の対応

「注意、指導、約束」および「受容、気分の安定」という対応が7割以上の保育者からあげられている。対応についての記述では、一つの「気になる」行動に対して複数の対応を記述しているケースが16(18.2%)ケースある。中でも、「注意、指導、約束」では、43.5%(10ケース)で他の対応が併記されている。つまり、単に注意や指導をするのではなく、気分の安定を図ったり誉めたりなど、他の対応も同時にとりながら行っていることが記述されている。

c. 保育者の対応の周囲の子どもたちの行動への影響

全体で59.4%の保育者が、「気になる」子どもへの対応が、周囲の子どもたちの行動にかなり影響すると考えている。しかし、ほとんど影響しないと考えている保育者が6.3%、

影響は少ないと考えている保育者が 9.4%いる。具体的な影響については、「気になる」子どもに対して、保育者自身の対応と同様の行動を周囲の子どもたちも行うようになると考えている保育者が半数以上である。また、「気になる」子どもに指導しているが、それをみて、周囲の子どもたちも自分の行動を見直すと考えている保育者もいる。しかし、保育者が「気になる」子どもに注意したりすることで、周囲の子どもたちの行動を阻害したり、萎縮させたりなど、マイナスの影響をあげている保育者も 15%程度いる。

d. 保育者の対応の周囲の子どもたちの「気になる」子どもに対する認知への影響

全体で 62.5%の保育者が、「気になる」子どもへの対応が、周囲の子どもたちの当該幼児に対する認知や評価にかなり影響すると考えている。しかし、ほとんど影響しない、あるいは、影響は少ないと考えている保育者がともに 6.3%いる。

周囲の子どもたちへの当該幼児に対する認知や評価への具体的な影響について、保育者の対応と同方向の評価をすると考えている保育者が 6 割以上である。また、「気になる」子に対して、ネガティブな認知や評価をすると考えている保育者が 25%いる。

考察

「気になる」子どもの行動特徴として、状況への順応性の低さや他者への乱暴や暴言、落ち着きのなさなどの行動が多くあげられている。これらは、他児との対人行動や集団での行動など対人的活動の側面であり、保育者が個別の活動よりも、子ども同士のかかわりなど対人的活動の中で、「気になる」と捉える傾向があると考えられる。

「気になる」子どもへの対応で最も多い対応が、「注意、指導、約束」と「受容・気分の安定」であった。また、「気になる」子どもへ注意や指導をする際には、受容や称賛など他の対応を含めながら行っていることが明らかとなった。これらのことから、「気になる」子どもに対して、当該幼児の様子を見ながら、その子の特性やその時の状態にあわせて対応している保育者が多いと考えられる。

「気になる」子どもに対する保育者の対応の周囲の子どもたちの行動への影響については、8 割以上の保育者が影響の強さを意識している。そして、影響の内容としては、「気になる」子どもへの保育者の対応を子どもたちがまねをするなど、保育者と類似の行動をとるようになると考えている。また、周囲の子どもたち自身が自分の行動を見直すなど、「気になる」子どもに対する行動ではなく、周囲の子どもたち自身の行動へのプラスの影響を意識している保育者もいる。しかし、一方で、マイナスの影響をあげている保育者もいる。

これらのことより、多くの保育者は、「気になる」子どもへの対応が間接的に当該幼児に対する周囲の子どもたちの行動や周囲の

子どもたち自身の行動に影響を与えるという意識を持ちながら保育にのぞんでいると考えられる。

保育者の対応の周囲の子どもたちの当該幼児に対する認知や評価への影響についても、8 割以上の保育者が影響の強さを意識している。そして、影響の内容としては、保育者の対応と同方向の評価をすると考えている者が 7 割近くいる。また、マイナスの評価をすると考えている保育者も 2 割ほどいる。これらのことから、周囲の子どもたちの「気になる」子どもに対する認知や評価への影響を強く意識して保育をしている保育者が多いと考えられる。

しかし、その一方、認知や評価についての自由記述では、5 名の保育者が未記入であり、対人認知的な影響については具体的にイメージできない保育者もいるのではないかと考えられる。また、「気になる」子どもへの保育者の対応の周囲の子どもたちの行動や当該幼児に対する認知の影響を、ほとんど意識していない保育者も少数ではあるが存在する。「気になる」子どもたちの行動は、周囲の子どもたちとの関係の中で大きく変化していく。周囲の子どもたちから受け入れられることにより、保育者にとって「気になる」子どもは、集団の一員となり、その子らしさを発揮しながら適応していくのではないかと考えられる。それゆえ、「気になる」子どもへの保育者の対応が、周囲の子どもたちの行動や当該幼児に対する認知に影響するのだということを、保育者自身が十分意識しながら、「気になる」子に対応していくことが重要であるとする。この点を保育現場で提言するためには、保育者の対応が周囲の子どもたちの当該幼児に対する行動や認知に影響を与えていることを実証的に明らかにするが必要である。

(2) 実験的研究 1

目的

同じ逸脱行動をとる子でも、保育者のその子に対する言葉がけの内容によって、周囲の幼児のその子に対する認知に違いが生じるのではないかと考え、この点を明らかにする。具体的には、逸脱行動をとる主人公とそれに対するポジティブもしくはネガティブな言葉がけをする保育者が登場する例話を提示し、主人公に対する好意度や認知について尋ね、それらに保育者の言葉がけの内容によって違いが見られる否かを明らかにする。

方法

対象児：幼稚園の年長児 61 名(男児 30 名、女児 31 名、平均年齢 5 歳 10 ヶ月)

材料：逸脱行動をとる子が登場する話、2 話話(「集団逸脱行動」：いつもみんなと一緒に集まらない、「不快行動」(表 1)：すぐに友だちを叩いてしまう)とそれらを表す場面絵及び保育者のペープサート。好意度を評定するための大きさの異なる が順に 4 つ並んで

描かれているボード。
 手続：個別面接により、2つの例話を提示した。一方の例話では保育者の言葉がけがポジティブな場面を提示し、もう一方ではネガティブな言葉がけを提示した。例話と保育者の言葉がけの組み合わせにより、対象児は4群に分かれた。例話ごとに、主人公への好意度（どのくらい仲良くなりたいかを4段階評定）とその理由、主人公に対する認知（どんな子だと思うか）を尋ねた。

表1 例話「不快行動」の一部

ストーリー	保育者の言葉がけ	
	P	N
Bは、嫌なことがあるといつもお友達のことを叩いてしまいます。		
ある時は、お友達が積み木を貸してくれなくて、その子が使っている積み木を無理やり取るうとして叩いてしまいました。そんなBを見て先生は…	「Bもその積み木で遊びたかったんだよね。使いたかったら『貸して』って言おうね。」	「Bは、どうしていつもすぐにお友達を叩いちやうの!? そういうことしちゃダメでしょ!! Bはいじわるなんだから!」

結果

好意度：好意度の平均得点は表2の通りである。例話ごとに、保育者の言葉がけによる平均の差の検定を行った結果、両例話とも保育者の言葉がけがポジティブな方が、有意に好意度が高い（「集団逸脱行」： $t=2.48, p<.05$, 「不快行動」： $t=4.14, p<.001$ ）。

主人公に対する認知：主人公についての言及を、ネガティブな側面の言及(N)、ポジティブ及びニュートラルな側面の言及(N+NT)、無回答+その他に分類した。保育者の言葉がけ×評価の側面の²検定の結果、両例とも5%水準以下で有意であった。両例話とも保育者の言葉がけがネガティブな場合、ポジティブな言及が少なく、ネガティブな言及が多い。

考察

同じ逸脱行動をしても、その子に対する幼児の好意度や認知は、保育者の言葉がけにより異なり、当該幼児の逸脱行動やネガティブな特性を言及して注意するよりも、行為の意図について言及して注意する方が、ポジティブな評価に導きやすいと考えられる。

表2 好意度評定得点（実験的研究1）

		平均得点	S D
例話1「集団逸脱行動」			
保育者の言葉がけ	P (N=31)	2.42	0.99
	N (N=30)	1.80	0.96
例話2「不快行動」			
保育者の言葉がけ	P (N=30)	2.37	1.00
	N (N=31)	1.39	0.84

(2) 実験的研究2

目的

実験的研究1では、年長児において、同じ逸脱行動をしても保育者が行為主のネガティブな行動や特性を言及して注意するよりも、行為の意図を言及して注意するような言葉がけの方が、行為主に対する認知が好意的になることが明らかになった。本研究では、実験的研究1の追試として、保育者の言葉がけの種類、対象年齢、逸脱行動の内容、保育者の表情図の非提示など、実験条件を変え、同様の結果が得られるか否かを検討する。

方法

対象児：幼稚園の年中児（平均年齢5歳3ヶ月）、年長児（平均年齢6歳1ヶ月）各54名。

材料：逸脱行動をとる子が登場する話、2例話（「ルール違反」：いつも順番を守れない、「攻撃的行動」：すぐに友だちを叩いてしまう）とそれらを表す場面絵。好意度を評定するための大きさの異なるが順に4つ並んで描かれているボード。

手続：個別面接により、2つの例話を提示した。保育者の言葉がけは、行動言及、特性言及、意図言及の3種類である。例話と保育者の言葉がけの組み合わせにより、対象児は各年齢3群（各18名）に分かれた。例話ごとに、主人公への好意度（どのくらい仲良くなりたいかを4段階評定）とその理由、および主人公に対する認知（どんな子だと思うか）を尋ねた。

結果

好意度：好意度の平均得点は表3の通りである。例話ごと学年別に、保育者の言葉がけによる平均の差の検定を行った結果、年中児の攻撃的行動場面にものみ有意傾向が認められた($F=2.73, df=2, p<.10$)。多重比較(LSD法)の結果、意図言及と行動言及および特性言及との間に5%水準で有意差が認められた。年中児において、攻撃的行動場面では、保育者が行為主の意図を言及する場合に、行動や特性の言及の言葉がけよりも、好意度が高かった。

各場面・各言葉がけにおける年齢による平均得点の差を検討した。その結果、ルール違反場面の意図言及の言葉がけにおいて有意な差が認められた($t=2.12, P<.05$)。また、攻撃的行動場面においても意図言及の言葉がけにおいて、有意傾向が認められた($t=1.68, p<.10$)。両場面とも、行為主の意図

を言及した言葉がけにおいて、年長児よりも年中児の方が、好意度が高いことが示された。

好意度評定の理由は、保育者の言葉がけによる差も年齢差も見られず、両場面とも登場人物の行動について言及する幼児が最も多かった。

主人公に対する認知：保育者の言葉がけによる差も年齢差も見られず、両場面とも登場人物のネガティブな特性について言及する幼児が最も多い。

考察

実験的研究1とは異なり、年長児では言葉がけの違いによる差はみられなかった。しかし、年中児の攻撃行動場面において、保育者が行動や特性を言及して注意するよりも、行為の意図を言及して注意する方が、他児からの認知が好意的になることが示唆された。実験的研究1との結果の違いは、本研究においては言葉がけのみで、保育者の表情図を提示していない影響ではないかと考えられる。

表3 好意度評定得点（実験的研究2）

場面	年齢	保育者の言葉がけ	平均得点	SD
ルール違反	年中児	意図言及	2.22	1.21
		行動言及	1.78	1.11
		特性言及	2.28	1.18
	年長児	意図言及	1.50	0.79
		特性言及	1.72	0.83
攻撃的行動	年中児	意図言及	2.33	1.33
		行動言及	1.61	0.61
		特性言及	1.67	1.03
	年長児	意図言及	1.67	1.03
		行動言及	1.50	0.62
		特性言及	1.33	0.69

4. 研究成果

詳細な成果は、調査研究、実験的研究1及び2に記載したとおりである。以下には、3つの研究成果をまとめて報告する。

これまで、集団保育場面で「気になる」子に対する保育者の対応の周囲の子どもたちへの影響についての保育者自身の意識に関しては、ほとんど調査されていなかった。本調査研究によって、約8割の保育者は、自分の対応が周囲の子どもたちの当該幼児への行動や認知に影響を与えていると考えているが、影響しないと考える保育者も存在することが明らかとなった。「気になる」子に対する保育者の対応が、周囲の子どもたちの当該幼児への行動や認知にどのように影響するのかを明らかにできれば、保育者のかかわり方への新たな視点を提供できるであろうことが示唆され、本実験的研究の意義が確認できた。

実験的研究1及び2により、逸脱行動をとり、他児とのかかわりが難しい幼児に対して、保育者がどのような言葉がけをするかによって、周囲の子どもたちの当該幼児に対する好意度や認知が影響されることが明らかとなった。これまで、他児とのかかわりに課題を持つ幼児に対して、その子自身の個人内要因のみをとりあげ、社会的スキル訓練などを行うことがほとんどであった。しかし、本研究では、周囲の子どもたちへの働きかけによる課題の解決という新たな視点を提供した。特に、発達障害児への対応に関しては、周囲の子どもたちの当該幼児への認知を肯定的にすることにより、当該幼児の他児とのかかわりを保証できる可能性が示唆された。

具体的には、逸脱行動をとった子どもに対して、逸脱行動やその子の特性に言及しながら注意するのではなく、行為の意図を言及しながら注意することで、当該幼児への好意度が高くなり、肯定的な認知へと導く傾向にあることが明らかとなった。

しかし、逸脱行動の種類や対象児の年齢、さらに、保育者の言葉がけだけでなく表情やトーンなども影響する可能性があり、今後のさらなる研究が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

松永 あけみ、玉谷 遙、幼児の他児認知に及ぼす保育者の言葉がけの影響(2)、群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、査読無、63巻、2014、pp.117-127

松永 あけみ、「気になる」子どもへの保育者の対応と周囲の子どもたちへの影響に関する保育者の意識調査、群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、査読無、62巻、2013、pp.139-145

松永 あけみ、大久保 沙織、幼児の他児認知に及ぼす保育者の言葉がけの影響(1)、群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、査読無、61巻、2012、pp.189-199

〔学会発表〕(計2件)

松永 あけみ、幼児の他児認知に及ぼす保育者の言葉がけの影響(2)、日本教育心理学会第55回総会、2013年8月17日、法政大学市ヶ谷キャンパス

松永 あけみ、幼児の他児認知に及ぼす保育者の言葉がけの影響(1)、日本発達心理学会第23回大会、2012年3月9日、名古屋国際会議場

6. 研究組織

(1)研究代表者

松永 あけみ(MATSUNAGA, AKEMI)

群馬大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：10222613